

均衡、その結果としての「新世界に於けるヨーロッパ列強の無
力」(一八四頁)の所爲であつたと共に、又「イギリスと默契
があつ」(一九四頁)たが爲でもあるとせるが如く、既に世界
經濟時代に入れる十九世紀の各國史の眞の理解の爲には、常に
當時の世界狀勢を認識する必要があるを教示すると共に、其外交
史研究に於ても、唯徒らに公文書によつてのみ理解解釋するの
危険を戒しめたるが如き、洵に科學的なる方法論の適用は隨所
に見得らるゝと言へ、其概念の科學的嚴密性を缺けるを認め
ざるを得ないのは遺憾であるが、それにもまして私が全篇を道
じて受けた最深の印象は、著者が素朴なる唯物論者の態度を採
つて居られると言ふ事である。斯る私の印象が、果して何を意
味するかは、偏に讀者の此書の精讀に俟つが、兎もあれ、著者
が「アメリカ人は日本の開國の恩人など言ふ外交的措辭を避
け」(自序三頁)出來得る限り批判的に而も歪曲する所なく觀
察せんとせられた限りに於て、アメリカ史の眞相が或程度迄描
かれてゐる事は事實であり、此方面に於ける入門書として一讀
の價値はあらうと思ふ。(定價貳圓八拾錢)(杉本克己)

●京都帝國大學文學部史學科昭和八年度卒業
論文題目

國史專攻

- 近世封建社會と町人 青山 喬
- 徳川時代封建制度精神と宗教との關係に就て 藤田貞吉郎
- 奈良平安過渡期の時代精神 東伏見邦英
- 三教と町人精神 本谷一郎
- 近世と古學派儒教 岩城隆利
- 明治維新に於ける國學 岩瀬英治
- 淨土教興隆の史的意義 眞利安一
- 平安朝末期に於ける庶民階級の女性 野中正祥
- 上代社會と歌謡 多田傳三
- 近世の都市生活 櫻井文三
- 淨土教の發達と庶民 櫻井景雄
- 奈良朝に於ける農本思想と庶民生活に就て 茂川眞澄
- 石門心學と町人 橋多賀文雄
- 南北朝時代に於ける勤王思想に就て 高井悌三郎
- 莊民の生活 高石綱
- 長崎の勃興と地役人の成立

明治初期の開化思想

中世の和歌と時代精神

東洋史專攻

歸義軍節度使考

太平天國革命に就いて

新羅下代の王朝に就いて

前漢の奴婢に就いて

前漢武帝の抑商政策について

郊壇帑發生の一考察

支那古代に於ける商業の發達

南宋都臨安に關する諸考察

天寶時代の社會と法制

唐代の寺院財産に就いて

清朝の國語保存政策に就いて

西洋史專攻

農民戰爭の先驅者

英國十七世紀史より見たる Cromwell 共和政體の意義

ヘンリー八世當時の英國教會に對する一考察

中世獨逸に於ける高利貸として

英國テュードル王朝時代の絲割の研究

英國 Manors 組織崩壞過程に於ける Peasants' Revolt (1381年)に就いて

1848年伯林三月革命の前史のために

波部 武清

藤枝 晃

吳 繩 海

岩 永 大 亮

慶 松 光 雄

大 久 保 光 野

奥 山 秀 雄

大 島 利 一

佐 藤 正 義

田 邊 晃

八 木 法 忍

米 田 貞 一 郎

荒 田 新 吾

蛇 口 三 郎

堀 雄 夫

細 田 鼎

森 崎 周 一

中 島 亘

中 山 治 一

ローマ統治組織形態の變遷 附、民權の發達について

對外關係より見たる米國モンロー主義宣言の意義に就て

十八世紀中葉より十九世紀初頭に至る英國の社會的經濟的發展過程

シユタウフエン家の帝國支配に就いて

地理學專攻

人口を中心とせる佐渡島の地理學的考察 背城を中心として觀たる名古屋港の地理的一考察

中國地方の人口分布に就いて

大野川流域の人口地理的研究

富士山高距測定の測量史的研究

越後北蒲原平野に於ける聚落の地理學的概説——特に立地を中心として

能登半島の人口地理學的研究

知多半島に於ける生産現象の地理的一考察

臺灣に於ける灌溉排水施設の地理學的研究

清水港の交通地理的研究

清 水 喜 一

信 濃 博

寺 田 善 次

山 内 嘉 夫

安 藤 經 一

今 村 新 太 郎

國 領 武 一 郎

近 藤 忠 思

日 下 卓 造

村 山 方 治

大 橋 英 男

朝 永 陽 二 郎

渡 邊 久 雄

山 口 平 四 郎

地理學談話會

昭和九年二月三日午後三時より陳列館内地理學實習室にて開催、今春卒業せんとする三回生の卒業論文概要發表を行った。小牧助教以下出席者二十一名、左記八君が約十分間づつ論文の概要乃至論文作製上の苦心を述べられた。(三回生今村、村山兩君缺席)

- 一、人口を中心とする佐渡島の地理的考察 安藤 鏗 一
- 一、中國地方の人口密度圖について 國領 武一郎
- 一、大野川流域の人口地理的研究 近藤 忠
- 一、富士山高距測定の測量史の考察 日下 卓藏
- 一、能登半島の人口地理的考察 大橋 英男
- 一、知多半島に於ける生産現象の地理的考察 朝永 陽二郎
- 一、臺灣に於ける灌溉排水施設の地理學的研究 渡邊 久雄
- 一、清水港の交通地理的研究 山口 平四郎

以上八名の裡四名までが人口地理をテーマに取つたことは著く注目される。そして右のうち、安藤と大橋とが孰れかといへば地誌的態度を以つて、夫々佐渡及び能登半島の人口現象を取扱つたに對し、國領は廣大なる中國地方を市町村別に人口密度圖上に描くアルバイトに重點を置いてのち、人口分布を規定する要素を考究し、近藤は河川流域なる一單元をとつて水系及び高度との聯關に於て人口密度を論じて、各自の特色を發揮してゐる。また、日下の論文は從來に見ざる異色であつてその專攻せる地圖學測量學の立場より富士山測量史について述べた。更に、朝永は知多半島の工業、農業、水産業を主に地人相關的に批判し各産業の支配的地域を設定したる經過を、また渡邊は從來餘り取扱はれざりし灌溉排水施設を以つて、學的に未開拓なる臺灣に特色ある農業地理的研究を行へる苦心を、最後に山口は港灣の交通地理的研究に於ける背城の問題に就き一つの新らしき試み夫々報告するところがあつた。因みに當日缺席せる

今村は名古屋港を背城を中心として交通地理的に研究し、村山は新潟縣北蒲原平野の聚落を取扱つたものである。以上の卒業論文は同教室發行の「地理論叢」誌上に回を逐つて發表される筈であるから、同好の士は就いて一讀あらんことを希望する。

●東洋史談話會記事

饗饒會 一月十五日(月)午後六時より寺町三條角三島亭にて前催、時日の關係から出席者は十二名に過ぎなかつたが鴛淵講師始め二三回生揃つて和氣需々裡に會を終り、今春卒業の三回生諸兄を送ることを得た。

第三十七回例會 二月二日(金)午後三時學生集會所乾室

出席者 三十一名本學年度最後の例會であり、空前の盛會を得た。三回生の諸兄に卒業論文の概要發表をお願いしたが時間の關係で簡單な紹介の暇しなかつたのは遺憾であつた。

發表をお願いした三回生諸兄は左の通り

- 藤枝晃君 岩永大亮君 大島利一君 奥山秀雄君
 - 吳繩海君 八木法忍君 米田貞一郎君(講演順)
- 講演後晚餐會。

●支那學會

饗饒會 二月三日午後三時半より東方文化學院京都研究所に於て開催。卒業生の内各學科より一名宛、終りに鈴木教授の講演あり。

- 神裕の社會學的研究 支那哲學科 入江 田 靜君
- 離騷の古音に就て 支那文學科 鹿 内 健 三君

張議潮に就て 東洋史學科 藤 枝 晃君

李卓吾に關する文獻に就て 鈴木 教授

鈴木教授が最近李卓吾年譜を撰せられたが、其後傳講師の令弟傳惜華氏が北京に於て獲られた李氏遺書を借覽せられたるが、其の説明、本書は上下二巻と附録とより成り、本篇には書簡、雜文を集め、附録には遺言、李卓吾に對する追悼文などあり、卷首に余永寧の序を附す。内容は李溫陵外紀と重複せる所もあり、焦竑に與へたる書簡を最も多しとなす。鈴木教授は大正十五年渡支の際、通州迎稱寺にて李卓吾の墓を發見されし事あり、當時は焦竑の撰せる墓碑が仆れてありしが現今は復舊せられたりといふ。

講演終了後支那料理の晚餐會あり、矢野名譽教授、鈴木・小島教授、那波・倉石助教授先輩學生多數出席盛會なりき。

●讀史會

大會 昨年十二月九日第二十三回讀史會大會を午後 時より樂友會館講堂に於て開催す。西田教授、中村助教授、牧野講師、藤講師以下多數參會す、左の研究發表ありて十時半盛會裡に終る。

畫之部

- 一、齋藤文書に就いて 文學士 時野谷 勝氏
- 一、文明史に於ける歴史記述の方法 文學士 高瀬重 雄氏
- 一、光悅の藝術とその社會的背景 文學士 西堀一 三氏

- 一、梅若能と口丹波 文學士 田中勝 雄氏
- 一、佛光寺派の繪系圖 井川定 慶氏
- 一、室町院領 中村助 教授

夜の部

- 一、中世末期の山崎 文學士 向井芳 彦氏
- 一、一升勸進について 文學士 伊藤只 人氏
- 一、鎌倉幕府に於ける社會統制上の一問題 藤 謙 師
- 一、神事田樂に就いて 西田 教 授

尙西田教授の講演に關して矢代日吉社並に上野條御勝入幡社の兩神事田樂の映畫を上映し、井川氏の講演に關する史料亦會場の一部に陳列された。

例會 本年二月十六日、午後六時半より樂友會館第一號室に於て閉會、中村助教授、牧野講師、藤講師以下會するもの二十四名、十時半閉會。

○演題

- 一、庄園に於ける御家人に就いて 三生 高井悌三 郎氏
- 一、異學の禁と定信の思想 文學士 有働賢 三氏

●民俗學會

見學 十二月十七日(日) 春日若宮御祭見學、西田教授先輩佐藤虎雄氏柴田助手以下一行十七名、午前十時京都驛を出發師走の冷雨の中を奈良に著く。前日十六日の深更に行はれた遷

幸の儀により始まつた御祭の諸儀は十七日午後一時過ぎの御渡式に依り最高潮に達する。行列の先頭を承るは消防組、各講社旗、奉讃會員、各町旗等近代色豊かなものであるが古式行列の先陣は日使代である。關白藤原氏參拜の姿を模したものである。當時の風俗を摹擬せしめる。次に騎馬の巨女、細男、十番力士、猿樂一座、田樂本座田樂新座、馬長兒、鞍馬、大和士代で、此の大和士一行は前述の猿樂一座、射手兒、揚兒、御師役流鏑馬等よりなつてゐる。次に徳川期の大名行列がある。眞物の競馬は行列の終了後に青、赤二馬宛て行はれた。此等の行列は松の下の檢知席の前で一々檢知を受けて社殿に參するものである。上代より近世までの風俗がその中に盛られてゐるのがこの御祭の永續した事を物語り又一つ特色ともなつてゐる。

競馬は四時頃終りそれより各自夕食をとり、六時過ぎ影向松より少し上手の齊庭に於て舞樂を見學する。壇は芝生で三尺程高く作られ正方形、四隅に篝火が焚かれてゐる。極月の冷氣の下に古風な雅樂に伴れて萬歳樂、延喜樂、地久、賀殿の舞、翁の舞、蘭陵王、納曾利、散手、賞徳等の舞、等が行はれる。社傳倭舞の優美に對して陵王等は鬼神の如き面をつけ舞も雄壯なものである。寒空に冴える管絃、軽々たる大太鼓、闇に閃爍する舞人の裝束、しばし上古の幽邃の境に入る心地がする。十一時頃全ての光を全部消し眞の闇の中を還幸の儀が営まれる。古都の靜寂は五體を引きしめる様である。十二時過ぎ一同無事に豊富なる收獲を喜びつゝ、京都に着いた。

例會 二月二十七日、樂友會館に於て夕七時より開催、十名
參會。左の講演あり。十時閉會。

一、支那に於ける赤色呪術の諸形相 森 鹿 三氏
一、築城に關する二三の説話 水 野 清 一氏

● 西洋史讀書會

例會 昭和八年十二月十四日午後六時より樂友會館第一號室
に於て開催、左の二君の研究發表及び讀書紹介ありて十時散會
出席者十八名

Charist の運動に就いて 二 回 生 甲 斐 不 二 男 君

IV. Kraus: Intercolonial Aspects of the American
Culture on the Eve of the Revolution. 二 回 生 廣 田 孝 一 君

例會 昭和九年二月一日午後六時半より樂友會館第一號室に
於て開催、左の讀書紹介ありて十時半散會、出席者二十六名。

Robert von Polmann: Geschichte des antiken

Kommunismus und Sozialismus.

三 回 生 荒 田 新 吾 君

E. Meyer: Die Sclaverei im Altertum

(Kleine Schriften 所收)

三 回 生 細 田 鼎 君

二月三日午後六時より安井千也に於て本年度卒業生送別豫餞
會を開く。會する者二十七名、歡を盡して九時散會。

會報

●會員移動

轉居

臺北市本郷町四條通り

波田野丈夫氏

●寄贈交換圖書雜誌目錄

氏帝室博物館年報 昭和七年

帝室博物館

青丘學報 一四

青丘學會

西洋史研究 四

東北西洋史研究會

史學研究 五の二

廣島史學研究會

哲學研究 一八の一二、一九の一二

京都哲學會

名古屋溫故會報告 一七

名古屋溫故會

人類學雜誌 四八の一二、附錄二、三。四九の一二

東京人類學會

歷史地理 六三の一二、三

日本歷史地理學會

社會經濟史學 三の八、九、一〇

社會經濟學會

田中譯ドーション蒙古史

三田史學會

考古圖錄

關東廳博物館

民俗學 五の一二、二二

民俗學會

史學雜誌 四四の一二、四五の一二、三

史學會

信濃 二の一二、三の一二

信濃郷土研究會

考古學雜誌 二三の一二、二四の一二

考古學會

井上世外公傳 二、三

井上馨侯傳記編纂會

國學院雜誌 昭和九年一、二、三月號

國學院大學

通報 二四

P・ペリオ教授

史迹と美術 三八、三九、四〇

史迹美術同攻會

社會學徒 八の一二、三

社會學徒社

南方土俗 二の四

臺北帝國大學南方土俗學會

史學年報

燕京大學歷史學會

經濟論叢 三八の一二、三

京都帝國大學經濟學會

史學 一二の四

三田史學會

文化 一の一二、三

東北帝國大學文科會

長安史蹟の研究 (東洋文庫論叢第二十の一二)

東洋文庫

玉篇の研究 (東洋文庫論叢第十九)

東洋文庫